

万国博覧会とは その2

「きたぞ、万博。」大阪・関西万博は4月13日に開幕し、順調に入場者数を増やしている。閉幕まで1カ月と少しとなった9月3日の一般来場者数はおよそ13万9千人で、累計1,700万人(1,713万1,256人)を突破した。前回ここに記した4月初頭の“万博開催反対”“今すぐ中止を!”という声は何だったのか、と今になって思う。

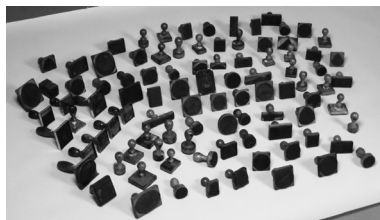


図1 日本万国博覧会参加館スタンプ
昭和45年(天理参考館蔵品)

大阪・関西万博では人気パビリオンや各国の食事、大屋根リングなど多種多様な話題があがっているが、そのなかの1つがスタンプラリーだ。大人も子どもも夢中になっているらしい。スマートフォンでQRコードを読み取り、画像データとして保存できるデジタルスタンプもあるが、意外にも昔ながらの「ハンコを押す」タイプのスタンプが人気を呼んでいる。これこそ、55年前の1970年日本万国博覧会(略称:大阪万博)で注目されたものであり、パビリオン独自のスタンプを帳面に押してたくさん集めるというこの行為が、一躍脚光を浴びたのである。「巡って」、スタンプを「見つけ」、自らスタンプを「押して」、スタンプを「集める」楽しみは55年経っても失われず、人の趣味趣向は年月を経ても簡単には変わらないものらしい。

当時の万博のパビリオンに設置されていたスタンプはほと

んどが木製ゴム印で、スタンプ台に印面を押し付けて転写する方式だった。参考館では、大阪万博の海外館76館78点、国内関連の館17館19点の計97点のスタンプを収蔵している(図1)。残念ながら太陽の塔とアメリカ館のスタンプを欠く。持ち手はゆるやかにカーブして握りやすくなっており、ゴム面は使用痕が強いのと経年劣化のため判然としないが、天然ゴムの赤ゴムと耐油性に優れた黒ゴムが使われている。半透明の合成樹脂製はまだ広く普及していなかった。スタンプには「パビリオンの名称」や「Expo'70」、「大阪万博のロゴ」、そして各国の「アイコンとなるもの」がデザインされていて、それぞれ個性的で魅力的だ。例えば松下館のスタンプでは、パビリオンの外観と中央に大きく「松下館」の文字がデザインされ、それを竹林のモチーフが取り囲むことで、実際のパビリオンのイメージを再現している。図2中央左のセイロン(現在はスリランカ)のスタンプ中央に配置されているのは、剣を持つ獅子。獅子は「シンハ」で、国民の4分の3を占めるシンハラ人のシンボルとなっている。このスタンプにはまだないが、1972年の国名変更時に多数派の仏教徒を意味する4枚の菩提樹の葉が国旗に付け加えられた。国旗には、少数派のイスラム教とヒンドゥー教のタミル人を意味する緑色と橙色の帯がそれ以前から付されている。スタンプにある水滴のような外縁は、1970年時点で既に菩提樹の葉をイメージしてデザインされたものかもしれない。

大阪万博でのスタンプラリー人気に目を付けたのが当時の国鉄で、鉄道旅行推進策の1つとして“ディスカバー・ジャパン”キャンペーンを打ち出し、昭和初期には既にあった駅スタンプをデザイン豊かに体系化して各駅に設置した。これにより、多くの駅を回ってスタンプを集めて楽しむ「押し鉄」が登場することになる。

それよりずっと昔から続く御朱印集めがスタンプラリーの起源だとする説もある。御朱印は霊場を巡り、経文を納めた証としていただくもの。江戸時代に広まったのは、自分でお参りできない人が代参を頼んだ場合、代参者は確に行った証明を依頼主に提示する必要があるからで、御朱印はその証拠となった。代参を請け負ったのが「六十六部廻国聖」で、壱岐・対馬を除く日本66カ国の霊場を巡って御朱印を集めた。江戸時代中期に廻国信仰が盛んになり、廻国聖が活躍するのだが、明治維新後この職能集団は否定され、消滅してしまう。スタンプラリーも後々見返して寺社巡り同様に思い出を楽しむことができる。現地で押したスタンプが足を運んだ証となって、本当の思い出になるのだろう。

大阪万博開催の30年後、民法のテレビ番組に鑑定を持ち込まれたこれらパビリオンのスタンプは「殿堂入りお宝第十九号」と認定され(図3)、その後参考館に寄贈された。



図2 日本万国博覧会参加館スタンプ帳 昭和45年(天理参考館蔵品)

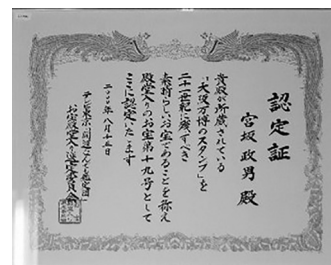


図3 日本万国博覧会参加館スタンプお宝殿堂入り認定証 平成12年(天理参考館蔵品)